

長谷川鉄工

代表取締役社長

小野 良二



小野 良二社長

改革継承し次世代の実像確立へ

2014年は創業100年を超える当社の歴史の中で、社史に深く刻まれる年となった。自身がトップとなつて迎える実質の初年であるとともに、かねて病氣療養中だった前社長の長谷川誠司が6月10日に享年64歳で永眠した。先代は1987年当社の社長に就任以

来、社内の古い体質や悪しき慣習にメスを入れ、技術開発、営業強化、社内制度の見直しなど改革を進め、常に新たな風を呼び込んできた。時に厳しく、時に優しく、自身も指導いただいた。今となつては直接教

えを請うことはできないが、先代が目指した長谷川

特需を得る形で、船舶用冷

凍機のあるべき姿を社員一同結束して継承・追求し、次世代の長谷川鉄工の実像を確立していく所存だ。

前期(2014年9月期)を振り返ると、冷凍機の製造販売事業、冷熱エンジン

ニアリング事業とも業績が大きく伸長し、過去最高に迫る実績を残せた。自身の舵取りというよりはむしろ先代が残してくれた遺産だと認識している。

冷凍機製造販売事業は国内の有力セグトメーカーの協力を得て、国内外への出荷量が順調に推移した。海外の代理店経由で東南アジア向けの出荷も好調だ。国内外とも補助金など国策で漁船の新造船を後押しする

冷熱エンジンニアリング事業の近況は、大手製氷メーカーの設備投資意欲を背景に、凍結プロセスや冷凍冷蔵域での温度管理設備の設計・施工で存在感を示している。特に超低温で高付加価値の設備を提供することで顧客満足を得て、差別化を図りたい。今後は機械や

冷熱技術の提案だけでなく、ファイナンスやアフター

サービスでの付加価値などを加味した提案手法も鮮明に打ち出していく考えだ。

昨年11月の取締役会で役員体制を刷新し若返りを図った。経営陣の意思伝達機能をより直系化し、機動力を高める。営業部門の組織も改編し東日本地域への営業も強化する。

製品開発では、高圧のフロン冷媒等の使用に適した高圧力差仕様の冷凍機「V E-11型」を開発している。15年中には投入したい。

現状維持は逆行、衰退の予兆と心得る。前進を意識して臨む。中期的には冷凍機事業、冷熱エンジンニアリング事業に続く第3の柱となる新事業を育てたい。

冷凍機の出荷量が伸長した。ただ補助事業の特需が無くなる。当然出荷量は減少する。実際、今期(15年9月期)の業績は幾分か不透明感が漂う。冷熱エンジンニアリング事業でいかに前期以上の実績を残せるか、次期につながる受注を獲得できると懸かっている。

冷凍機の出荷量が伸長した。ただ補助事業の特需が無くなる。当然出荷量は減少する。実際、今期(15年9月期)の業績は幾分か不透明感が漂う。冷熱エンジンニアリング事業でいかに前期以上の実績を残せるか、次期につながる受注を獲得できると懸かっている。